



家康公御政道録 全

增4
775
200



4
775
200



家康公御政道録一

大正二年一月一日
中村楯雄氏贈



一 相國秀忠公を小松大居士某之賢者成りと其の人称
もりしといふ家康公も及せ給ねと給ふに海
なり家康公乃御徳義教を御智恵甚勝とせ給ふ
事異國中於と不知者より天下と平一命をいふ
家康公より大將なり一凡天下と平創の元祖志前代
の英雄之徳を子孫する人必元祖の成法と信守て失
さば何れも子代も長くす一元祖の成法捨てぬる
時危七の基也

一家康公の徳を慕ひて世に武道は信事跡かゝ流儀の
精なりぬる時悲みて精を喰ひけり信世の武を家康
公の武とこのむしとて御作りの司馬は國大成とい
はれ戦と好時を心せし天下を平しといふ戦は忘る時危と
いふるを平の時も戦と志せしを武と信事跡かゝり

或人のいふ

一 又作曰農工商を國の寶也才農人の苦み一粒百
切して去年の秋より種として其を回るとは是れ
風寒無濕日陰を極くの苦勞なりて其を福と成
其成にして君よりより法人と成ひ其を減く其の勤
切に沙汰し君よりより食ひ民の苦を去るは是れ
希く使して若止む事と得ずして民を憐れ民の瘠を
用ゆて一民は是れ元くその身を以て元く其れを
國を以てするなり

一 又曰治國は武家の風俗の家のかく采録に成るは
志れ倫に待たんと事として我々業廢の時を成とて
其れを沙汰と知りて世に代りて西國に之を事とて
今川杯武と夫は己の家のかくは事として一又天子は
後多の院後醍醐天皇の御事として其れを戦と振り其れを

夫は己の御中大将武たふ事なりと一戦は打角とて罪
を犯すなり子とも忽ち死せざるは古来の例なり依り我
家は武道不事内成者大小上下たは不用く凡武た
不事者之邪と知りて其れを義理なり義理
を犯す者虚云多し虚云多し若は必死病之候成者
奢り女く驕り其れ若はあり女く是れ向う士味方と成
てた多し運心も成す款と成りていふは是れ

一 又曰大将を文武一致と知り軍法の二字は深て政たり立
各家職も能く勤る者も可用

一 家康公は士民たは家業能く勤る者好むは農工商
も勝る者好む者河内見させ給ふ者多し又徳庵の名
人も賞し給ふ河内能く勤る者好むは其れを名
取給ふ能く勤る者も好むなり

一 家康公の曰主君臣の度はあり其家も夫は臣下君

拾九

原原よりよりとていせいのまにけりもればおのまを原ま
子なる家老をけりも我れおのまに原の家老を
大三四拾萬石知りてしにあり君臣三人の知合て
八百石の進を知らは是れおのま一人は侍てしは
たしちよるおのまに下の家老に君臣を侍るは
しよどり君の威勢と申しありしに侍る威勢とに
いせいのまをいせいのま

一家康の八済先祖の済改たわしに選是ふは威着又別
勝して徳事の徳も四改と改先びいしに別たの徳
い武田の家法を御用ひて家老に侍入西の侍りし家老の家法御
ひけりいけし徳ひきてしに選はしは六年首の徳は
りて徳はより老より軽くともけり徳は徳をいせいのま
ていせいのまに侍りしに選はしは六年首の徳は
古例の徳は御用ひて徳は御用ひて徳は古例は

一

自にもえけるなりと作りしに選はしは
一家康の竹下代様と申すしに選はしは
小倉物も徳も徳くすしに選はしは
も此の老をいせいのまに選はしは
をいせいのまに選はしは
は徳は徳と申すしに選はしは
何して徳は徳と申すしに選はしは
は徳は徳と申すしに選はしは
成る徳は徳と申すしに選はしは
なれり徳は徳と申すしに選はしは
一十に選はしは徳は徳と申すしに選はしは
いせいのまに選はしは

一

或人の物徳し秀老公の云徳徳を人の徳しよりて入事

入る事有御田幸ふか東陽より編舞時物次物種正
の所はひ記者風流を元天下よ事者平一物を武た
時事八位長云の切て推ひひ一仇の先殺も平一原る
記者風流の事又花流にそ不測法を天武たの事人
として固も治事そ元物種の中より及ふ長云も
希あり下一是り万能一心美風一穢より記一と云れ
の物なり

一 考老云大坂子貴史念その内府孫中乃騎馬を
赤足ありしは行こも多ひくの雲来路もひ記する
地抄に左圖の作は其の馬一ひひの雲と記抄を記する
八行の中侍うしは約を成順小者より約よして雲来路中
より勇之何れどの考も約を成順小者より約よして雲来路中
けし記考を成順小者より約を成順小者より約よして雲来路中
内府孫中乃騎馬を

考の作しを圖一多の考を成順小者より約よして雲来路中
より勇之何れどの考も約を成順小者より約よして雲来路中
けし記考を成順小者より約を成順小者より約よして雲来路中
内府孫中乃騎馬を

事を以てし、この風を成しなす。此れ地を以てし、
よほひてを以てし、その要を武たるとも、
事をもし、人の命令のせりと斗う。孫とつて、
首の二十の内を以て、或は或は道徳を以て、
の死に知るとして、作らう。此れ地を以て、
して、地毒を以て、云々。孫とつて、
この地を以て、大に及ぶ。孫とつて、
と改め、孫とつて、孫とつて、
多し。此れ自地を以て、孫とつて、
う。遠きう、孫とつて、孫とつて、
孫とつて、孫とつて、孫とつて、
この地を以て、孫とつて、孫とつて、
酒の所相も、孫とつて、孫とつて、
く、命令も、孫とつて、孫とつて、

よほひて、酒の所相も、孫とつて、
孫とつて、孫とつて、孫とつて、
この地を以て、孫とつて、孫とつて、
酒の所相も、孫とつて、孫とつて、
く、命令も、孫とつて、孫とつて、

一 相國孫を以て、此の地を以て、
孫とつて、孫とつて、孫とつて、
酒の所相も、孫とつて、孫とつて、
く、命令も、孫とつて、孫とつて、

功となんとのをさしつゝいふに洪くをさるる所ぞいでしと云
ことなるのそとをいへりてをさるる所ぞいでしと云
流りてさるる所ぞいでしと云
なるをいへりてをさるる所ぞいでしと云
らるるのそとをいへりてをさるる所ぞいでしと云
三子石をいへりてをさるる所ぞいでしと云
物者守忠信の事形をいへりてをさるる所ぞいでしと云
物者守忠信の事形をいへりてをさるる所ぞいでしと云
小室の誠をいへりてをさるる所ぞいでしと云
物と法をいへりてをさるる所ぞいでしと云
物眼力未だをいへりてをさるる所ぞいでしと云
人一知也をいへりてをさるる所ぞいでしと云

一 物眼力未だをいへりてをさるる所ぞいでしと云
下とく竹をいへりてをさるる所ぞいでしと云
礼をいへりてをさるる所ぞいでしと云
也とのそとをいへりてをさるる所ぞいでしと云
至るり天下の事をいへりてをさるる所ぞいでしと云
こそ物と法をいへりてをさるる所ぞいでしと云
一 物者守忠信の事形をいへりてをさるる所ぞいでしと云
物者守忠信の事形をいへりてをさるる所ぞいでしと云
物者守忠信の事形をいへりてをさるる所ぞいでしと云
物者守忠信の事形をいへりてをさるる所ぞいでしと云
一 物者守忠信の事形をいへりてをさるる所ぞいでしと云
物者守忠信の事形をいへりてをさるる所ぞいでしと云
物者守忠信の事形をいへりてをさるる所ぞいでしと云
物者守忠信の事形をいへりてをさるる所ぞいでしと云

以蔵る衆に於て存ずる用ひは蔵るに依りては衆の所成なりといふは
もして然るに其の用ひは蔵るに依りては衆の所成なりといふは
秀吉の敗戦家かきまゝつとも用ひは衆の所成なりといふは
守大忍人成に依りては蔵るに依りては衆の所成なりといふは
日初は信田一とて用ひは衆の所成なりといふは
取之諸侍は初の中の人とて用ひは衆の所成なりといふは
名は信田一とて用ひは衆の所成なりといふは
といひて秀吉と秀吉との所成なりといふは
入万事は信田一の家を長に依りては蔵るに依りては衆の所成なりといふは
ふ中村は信田一の所成なりといふは
り成りては蔵るに依りては衆の所成なりといふは
秀吉の敗り中村を長に依りては蔵るに依りては衆の所成なりといふは
津田家の所成なりといふは
り信田一の所成なりといふは

家老は信田一の所成なりといふは
といひては蔵るに依りては衆の所成なりといふは
津田七とて信田一の所成なりといふは
おろしては蔵るに依りては衆の所成なりといふは
やといひては蔵るに依りては衆の所成なりといふは
下知しては蔵るに依りては衆の所成なりといふは
信田志十の所成なりといふは
忠ひ出しては蔵るに依りては衆の所成なりといふは
信田一万二千人の所成なりといふは
るといひては蔵るに依りては衆の所成なりといふは
八支隊一の所成なりといふは
つは信田一の所成なりといふは
所成なりといふは
といひては蔵るに依りては衆の所成なりといふは

言及のねつごおと海は使すもあつて又天の田りめ
ぬ白く志はたも甲と柳一歩ひれい今信田の家も葉ん
と志は長はなきあつてあしの中悉く困はふ天の田りめ
田の田りめはあつては葉ののちあつてはあつてはあつては
将軍作はれはは葉の田りめはあつてはあつてはあつては
甲の者との元のとく葉の田りめはあつてはあつてはあつては
えよよ二の味方の葉の田りめはあつてはあつてはあつては
ふ甲ののちあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
ても良の田りめはあつてはあつてはあつてはあつては
を信田の田りめはあつてはあつてはあつてはあつては
眼鼻鼻の田りめはあつてはあつてはあつてはあつては
の氏よりねつごおと海は使すもあつてはあつてはあつては
年よちあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
記してはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

見聞た味はひては半と年月の田りめはあつてはあつてはあつては
人の者との年月の田りめはあつてはあつてはあつてはあつては
のほりもまきあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
もなれ人のあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
たりも大ねあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
つ若し信田の田りめはあつてはあつてはあつてはあつては
是も若し信田の田りめはあつてはあつてはあつてはあつては
人の云事と用ひすはあつてはあつてはあつてはあつては
我あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
見る事と年月の田りめはあつてはあつてはあつてはあつては
物もあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
たあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
突つてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
ねつごおと海は使すもあつてはあつてはあつてはあつては

海軍の河守及り和田平八郎は原が水踏入用
 ん仕切りの水踏定まは後流の浦に送る所又実ヶ原
 軍の時を早甲船等の女兵をよて船の事更折城の月
 後流原中流と流定は成おの河守者あり依て備前
 安藝お國と流下を後秀お二条一少登の時秀お云
 おくは思たを一高と流の事二高と全印に高と流中
 右京を成りし一高と流の事一高と全印に高と流中
 病と接し秀お二条一少登の時秀おは是れ高と流中
 三心取の如き全印に流中お京を全高と流の如流仕
 二条一高と流の如き全印に流中お京を全高と流の如流仕
 之後全印に流中お京を全高と流の如流仕
 上流別流の如き全印に流中お京を全高と流の如流仕
 女人の志をうへし一高と流の事一高と全印に高と流中
 新り成るを全印に流中お京を全高と流の如流仕

深く流るる流を流定たの事一高と全印に高と流中
 て流るる流の事一高と全印に高と流中
 まを打撃し流の事一高と全印に高と流中
 助に流るる流を流定たの事一高と全印に高と流中
 事一高と全印に高と流中
 同時地流と中流と一高と全印に高と流中
 おもく流るる流を流定たの事一高と全印に高と流中
 春も流るる流を流定たの事一高と全印に高と流中
 夏も流るる流を流定たの事一高と全印に高と流中
 秋も流るる流を流定たの事一高と全印に高と流中
 冬も流るる流を流定たの事一高と全印に高と流中
 春も流るる流を流定たの事一高と全印に高と流中
 夏も流るる流を流定たの事一高と全印に高と流中
 秋も流るる流を流定たの事一高と全印に高と流中
 冬も流るる流を流定たの事一高と全印に高と流中
 春も流るる流を流定たの事一高と全印に高と流中
 夏も流るる流を流定たの事一高と全印に高と流中
 秋も流るる流を流定たの事一高と全印に高と流中
 冬も流るる流を流定たの事一高と全印に高と流中

又海軍成七すとして首領の天啓第一天下の権柄は欲
 けし即ち有力史書人と三筆何れを忽ちた権柄ありと欲
 したるは其致しあるものありしをたすたるはたれ
 天下の太平と法をたすたるはたすたる人民と困窮
 たるをたすたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 起して地を大天下を肯ん非しとの地をさすたる
 してらさるるして官より其致のたすたるはたすたるは
 抑りたるはたすたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 してたるはたすたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 理より七ししてたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 徳恩のよりたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 漸次よりししてたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 してたるはたすたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 先程のたすたるはたすたるはたすたるはたすたるは

及にそのたすたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 即ち少人として其致のたすたるはたすたるはたすたるは
 何事もしも其致のたすたるはたすたるはたすたるは
 の侍たるはたすたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 の若し其力よりたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 と多し其致のたすたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 其致のたすたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 今も今もはたすたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 等の物たるはたすたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 より抑りたるはたすたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 あり侍たるはたすたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 既成事の時よりたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 今も抑りたるはたすたるはたすたるはたすたるはたすたるは
 もくろむるはたすたるはたすたるはたすたるはたすたるは

是と云く押しおきし時、其の故を何と申すか、
と尋ねれば、十三年八月、其の日の夜、
以て神代のはりりく、
日付ともせらば、
せしりりて、
報し、
中、
た、
之、
き、
百、
上、
病、
好

一
成、
此、
ま、
て、
今、
ま、
加、
休、
後、
家、
又、
人、
揚

の如くと言ふ天下の如く世を治むるは如く言ふ事なり
切に切らざる事ありと事なれば如く言ふ事なり
定は將軍の天下の政をんを用ひたる事あり如く
此洲の如くは如く言ふ事ありと事なれば如く
す一此洲の如くは如く言ふ事ありと事なれば如く
事ありと事なれば如く言ふ事ありと事なれば如く
或河をえん中一此洲の如くは如く言ふ事あり
抑諸坊をがごとく言ふ事ありと事なれば如く
中抑諸坊をがごとく言ふ事ありと事なれば如く
乃人一人の如く言ふ事ありと事なれば如く
何り人一人の如く言ふ事ありと事なれば如く
老若の如く言ふ事ありと事なれば如く
まの如く言ふ事ありと事なれば如く
心付成故す言ふ事ありと事なれば如く

世の上
勝つる
ころ

根を以て世を治むるは如く言ふ事なり
世の如く言ふ事ありと事なれば如く
とを以て世を治むるは如く言ふ事なり
老若の如く言ふ事ありと事なれば如く
凡そ如く言ふ事ありと事なれば如く
の他法何れも言ふ事ありと事なれば如く
やる如く言ふ事ありと事なれば如く
板の如く言ふ事ありと事なれば如く
そり者も人言ふ事ありと事なれば如く
細心も言ふ事ありと事なれば如く
料理も言ふ事ありと事なれば如く
と云ふ事ありと事なれば如く
中何れも言ふ事ありと事なれば如く
流も言ふ事ありと事なれば如く

百上級として凡そ礼世の礎を私れたの事この士もわ
けられた勇氣成る事と云ふは自らも私に感振ひ
氣づくとして不中として一入彼者の忠信を共大に心は
むす核成事と武たふ常例の者がすからうさば皆者
武切はほらう物と申すは物ぞんがせしむる忠
信の者なりとてさふひ切りたる事をいふは物之主たる
つしは地取られし氣とあるはいつさるを申すを軍
陣ら大敵の中へ入て大和と成る者多しと云ふ
さふれしてはふより命を妻子と云ふ道を知りたる
さふひ切りたる事といふを大剛の志とて思て國と治り
天下の主たるありぬのさうにれしなるも志は
法人の志と考申しはさる事と云ふ者のはらう成
能た其志を忠信と云ふは相成るといふ事ハ國家を
一の爲めやくるの心をさる大に相成りしと云ふ侍

大将として凡そ礼世の礎を私れたの事この士もわ
武者とのふ此相は分別も不入相ふしは海軍と云ふ
と云ふは是も古同ぬれたの者能実成りして政の下知も
能くさ海軍も力一と云ふは相成りしと云ふ侍
静るうとく大に相成りたるもさるけ一編と
ぬり能く相又備の家老と云ふは是と分りたる事
は之も所を古同ぬれたの者能実成りして政の下知も
能くさ海軍も力一と云ふは相成りしと云ふ侍
具負たかく相成りしと云ふは相成りしと云ふ侍
一と云ふは主人のおもふ命を惜まぬやふ事ありて
ひ千里のたはむも相成りしと云ふは相成りしと云ふ侍
と云ふ事我力も同じと云ふは相成りしと云ふ侍
實は口實と利刃と云ふは勇氣と命と能く一相成り
能くさ海軍も力一と云ふは相成りしと云ふ侍

おしり流とていつて八夜の宵者しき程は天宮の長
久手金銭の財お騎はれて抱えよおれ去年うぢま
款平騎計伏掛りりし一宵者たか人きんてほり
きり河波志志んは河はす一夜の者流志うり
はち少くんの別敵事と能知り流志及り人及り
宵八宵まぬる夜をとりし流志流の柄は
序接りして唯はたし今この宵は流の若相流り
選れはたし何れ流志の相文とまわるとか
選く流志流志今も流志の者ハ幅流んとす
立ありりりり流の者別と流志を志し
心當りて選しと心ひぬ志たのう流志とは若りそ
尾と金包の流志は選り此志を流志の中流志
取流志流志志しり流志なり流志は流志志
心流志流志の若又流志今とまた其流志は流志

夫其事と為りて流人の中事と接りてまくの流志
人ともひひ流志たれと一戸能申また流志流志
流志の流志流志流志流志流志流志流志流志
負り流志流志流志流志流志流志流志流志流志
りり流志流志流志流志流志流志流志流志流志
猶の如く公家と武家の流志流志流志流志流志
金と流志流志流志流志流志流志流志流志流志
と好し流志流志流志流志流志流志流志流志流志
也流志流志流志流志流志流志流志流志流志流志
の流志流志流志流志流志流志流志流志流志流志
物と金流志流志流志流志流志流志流志流志流志
急り公家の流志流志流志流志流志流志流志流志
絶て流志流志流志流志流志流志流志流志流志
一 亦と流志流志流志流志流志流志流志流志流志

賤と者よとの大賤の内は此の我力とありて
一 法は皆一人威を振ひを人より我の用と立てし
よふに所ある者又奢者之の端は我を人より知
るふに所あるは此の今度より振ひては此の用を何
部んや先とて此の知るべき人をして我の教
を我の用ひらば我の志義とて此の法人は我の
ことを我の用ひらば我の志義とて此の法人は我の
よの志はとてよとて此の私欲とて此の志はと
一 又よふに一家に治る人として此の志はとて此の私欲と
ぬれど一家に成る男の権柄にて此の志はとて此の私欲と
のぞく或は此の志はとて此の私欲とて此の志はと
病成る者も必く此の志はとて此の私欲とて此の志はと
物で此の志はとて此の私欲とて此の志はとて此の私欲と
小上とて此の志はとて此の私欲とて此の志はとて此の私欲と

任より力に付けて家も治りて誠の志といふをたす
根をふく根をふく根をふく根をふく根をふく根をふく
の志はとて此の私欲とて此の志はとて此の私欲と
根入をいふは此の志はとて此の私欲とて此の志はと
友もたす根をふく根をふく根をふく根をふく根をふく
願ひては此の志はとて此の私欲とて此の志はとて此の私欲と
るに己の利はとて此の志はとて此の私欲とて此の志はと
欺りて此の志はとて此の私欲とて此の志はとて此の私欲と
とて此の志はとて此の私欲とて此の志はとて此の私欲と
古法を修りて此の志はとて此の私欲とて此の志はとて此の私欲と
唐志の清政はとて此の志はとて此の私欲とて此の志はとて此の私欲と
法の上をたす此の志はとて此の私欲とて此の志はとて此の私欲と
もなれよ此の志はとて此の私欲とて此の志はとて此の私欲と
家法を根にたす此の志はとて此の私欲とて此の志はとて此の私欲と

よ大なるあふまきぞやのとははるるの家老たのましくと
流るの先社のとととと文大よ流りたる中流り時時
よほつりても所々とある事と心合ふとよとよ若
たも石急者の御振る子細を親の教と討とて野人
の心と知れ時と流りととととてなれ事とよとて
將軍の教とととととととととととととととととと
んよ用ひたてととととととととととととととととと
と上意ありれしととととととととととととととととと
作付も新加地加増所は留まの故とととととととととと
らとら所は下とととととととととととととととととと
改改今も永代中一人との書付上とととととととととと
酒井阿部井伊中多井原大久保内友此介一流く
の所氏とととととととととととととととととととととと
又は作付所は信長大就私人の者所は討討の故と

河津は作付所とととととととととととととととととと
祖方の改改たてとととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
との者所とととととととととととととととととととととと
及細川山名島田等が有りては將軍の御とととととととと
願して改改家内と押所して山名六十ヶ國の主たる故とと
教下ととととととととととととととととととととととと
又の改改と有り云方義輝と討三好の内は松永を叔威と
振りて亦三好討或は信長を信虎の家法と改改ととととと
条の新法と改改事と我々大なる故とととととととととと
祖方の改改と改改て家内有り又三利が宗とととととと
又の改改と著とととととととととととととととととととと
云方將軍と各斗ととととととととととととととととととと
をを頼み改改ととととととととととととととととととと

堂も達々の勸進すれど如くおいらも書きて事ごとく大内義隆
上杉則政今川氏武田勝頼品こそ尊厳皆先祖と非よみて
家を破り力を失ふなり又親と一心の一致あり家老の者の然
諫言を用いざるも則親と非よみて同じ世後叔家の儀に
ちよとて天下の諸大名先祖の家法守る家ありは然く
念と入内徳守礼す下へ大略をきく事あり又私欲はして
一寸先へ不見人民と困り民の苦しむをありて成て金銀と
なり親へ入られたる古法に替り事も皆下へ其後判者ハ
下へ下へ國家の揺動の基ひを地獄に心ならず主のおとろけ
善人としてありしを主君よ用ひて人民は憐れ法衣榮
堵して其國は治る事ありすも忠信と云亦捨ち奉り命
法衣名束とすも終りの家職と能く替り家ごとく治る
家作と失ひざるも天下の忠も先祖の功もすもつこ
國を治る事あり其先祖の仕置も改りて我儀ありは不

孝の至極也人間の習ひ親先祖の教に討て是を考ふも
先祖を忘れざる人のため武家を教徳の世に乱れ
以我力の者をして慈愍と下の根として家職を初とし
家無事治る是を忠佐の賞候とす

一
又上より三つに分ちて月すは城出候はせられ百姓は田を
くむる中へ賜れて家の白きあり近くとすくせられ
田の畔は棒立せ棒も藁等より多し中は刀脚衣の格付
重なり不審と之ひの少く近寄能く是れが家人の近
友と人をして呼ばれたる事ありて是事も其の侍は
手と引系ありはゆき中侍共侍田の中へ入内進者も侍
候へ水はけある事ありてかき洗ひ大小は我衣
子母も耐奉直候し中をわけては御是れも友事候
小力もそとなくおん侍ありて知れぬ力も是れ
以て記業とせむ事として洞と流しはぬと由候も是れ

高直法中上者と決ちつては成りぬく事なき事付上
るも後方より此等と存存只今とて分るる口は按ず付
海部と此等家内と観而して見れば誅及して仕し物故中
より猶も猶も後方より海部と観るる事なき事付上
てて存存の事と細く申すは我亦西本と海部は月付と
云付を或時海部と申すは海部と云ふ事なき事付上
小栗ヶ村の事と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上
と云ふ付何れ海部付言上申す事なき事付上と云ふ事
海部と云ふ事なき事付上言上は伝はれ我々方より事なき事
云々事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事
者として事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事
の事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上
り海部と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事
小栗と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事

悪事と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事
と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事
非成故と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事
事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上
主人と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事
成り語を以て敗ると云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上
いり絶つて何れと云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上
昔者よ云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事
るれば海部と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事
き物故と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事
悪も知れぬ心と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事
善り海部と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事
小栗忠義と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事付上と云ふ事なき事
後事ぬくは家老も目付も為ると云ふ事なき事付上と云ふ事なき事

一
經理在位者の心も天下人との定法破り千人四百す
とてし長より人構りて人の徳ある者古人の元氣を
依りて我流が心をこころの分別を以て成りて人の
心を天命よりおきて家七人の徳と心持し争ひ
本の根も徳者へて元氣も年々成りて其徳も愈
々衰りて其意也とて者へて根持し成りて
政法の元も徳者へて其徳も年々衰りて其徳も愈
一 又上言より天下の法を貴ぶるの二つを以て徳を貴
ぶるべし徳者へて其徳も年々衰りて其徳も愈
大下上下となくころころ事や成りて其徳も愈
多し者へて其徳も年々衰りて其徳も愈
目が徳者へて其徳も年々衰りて其徳も愈
批判年より徳者へて其徳も年々衰りて其徳も愈

一
毛公の徳者へて其徳も年々衰りて其徳も愈
つんとありて其徳も年々衰りて其徳も愈
名も其徳も年々衰りて其徳も愈
あるも其徳も年々衰りて其徳も愈
一 上言より徳者へて其徳も年々衰りて其徳も愈
トの徳者へて其徳も年々衰りて其徳も愈
自分も其徳も年々衰りて其徳も愈
一と徳者へて其徳も年々衰りて其徳も愈
然るも其徳も年々衰りて其徳も愈
功の者も其徳も年々衰りて其徳も愈
徳者へて其徳も年々衰りて其徳も愈
徳者へて其徳も年々衰りて其徳も愈
徳者へて其徳も年々衰りて其徳も愈
徳者へて其徳も年々衰りて其徳も愈
徳者へて其徳も年々衰りて其徳も愈
徳者へて其徳も年々衰りて其徳も愈

てその為共家必七す物ぞ此ゆ果力が高上りて有ては
 才も何事なるも云はずやねぞ詔人よ親くしてお家
 力の上を始り家老たの力の上すして吾事の内法をす
 及んらん若らぬらた吾事あるを早く言やまは
 自らよ誤なきに申す換はずんば此の度細く
 吾事と認めよ天下の目と見て天下の身と見て天下
 の心と見ておれんをこそと大云壺う詞はより世上の
 者をを急なくも徹せしめども是と十年の揚屋
 知十月の入り知しりし何とかくしてはせしり批判
 其の町ありやうかたりしりし何とかくしてはせしり批判
 今秋事なる事とて家國と治る者な心と付政たる人
 これ信長の六月言、計れおれ時宗をこの有月す
 こそおれやしとあり明記をて老中よ若斗も知せら
 まももすしと家老た事ともも家老たり記れた
 がくし事天たかくす能く知り物もあり内しと
 心と心と悔りも汝能く心と心となくはせよ事
 今秋事なる事とて家國と治る者な心と付政たる人
 これ信長の六月言、計れおれ時宗をこの有月す
 こそおれやしとあり明記をて老中よ若斗も知せら
 まももすしと家老た事ともも家老たり記れた
 がくし事天たかくす能く知り物もあり内しと
 心と心と悔りも汝能く心と心となくはせよ事
 今秋事なる事とて家國と治る者な心と付政たる人
 これ信長の六月言、計れおれ時宗をこの有月す
 こそおれやしとあり明記をて老中よ若斗も知せら
 まももすしと家老た事ともも家老たり記れた

と心と心と悔りも汝能く心と心となくはせよ事
 今秋事なる事とて家國と治る者な心と付政たる人
 これ信長の六月言、計れおれ時宗をこの有月す
 こそおれやしとあり明記をて老中よ若斗も知せら
 まももすしと家老た事ともも家老たり記れた
 がくし事天たかくす能く知り物もあり内しと
 心と心と悔りも汝能く心と心となくはせよ事
 今秋事なる事とて家國と治る者な心と付政たる人
 これ信長の六月言、計れおれ時宗をこの有月す
 こそおれやしとあり明記をて老中よ若斗も知せら
 まももすしと家老た事ともも家老たり記れた
 がくし事天たかくす能く知り物もあり内しと
 心と心と悔りも汝能く心と心となくはせよ事
 今秋事なる事とて家國と治る者な心と付政たる人
 これ信長の六月言、計れおれ時宗をこの有月す
 こそおれやしとあり明記をて老中よ若斗も知せら
 まももすしと家老た事ともも家老たり記れた
 がくし事天たかくす能く知り物もあり内しと
 心と心と悔りも汝能く心と心となくはせよ事
 今秋事なる事とて家國と治る者な心と付政たる人
 これ信長の六月言、計れおれ時宗をこの有月す
 こそおれやしとあり明記をて老中よ若斗も知せら
 まももすしと家老た事ともも家老たり記れた

一 用事の内し 用事の内し 用事の内し 用事の内し

一 用事の内し 用事の内し 用事の内し 用事の内し

代目七も是れ歎歎流る者さうさうさうし主へ成る力
もせ後後身行人帳ふ者目行へしと拾首月もさ
ゆはゆをへしゆも、物なり者も何れも天下の物事
とて巻も又毫もそそ末も考らる眉もゆり成り
那しゆ者も秀者の浪子も百枚利者人せし
うも彼れ遊惑も名ひぬさたのふとゆり成り成り
七すりぬる向も一様しとて浪子もゆり成り成り
那も納も力も南へ分産者梅へ江也もゆり成り
きりり天下もゆり成り成り成り成り成り成り成り
張本七世の改しゆり成り成り成り成り成り成り成り
流人もゆり成り成り成り成り成り成り成り成り成り
の各事大坂の那しゆり成り成り成り成り成り成り成り
本もたもえん松松別で十枚の若の僕れさうさうさ
心をもゆり成り成り成り成り成り成り成り成り成り

己う分取より傳り流るく己為は頻と成り成り成り成り天
たのおくもそそ七ひぬさこもゆり成り成り成り成り成り
内通しゆり成り成り成り成り成り成り成り成り成り
隠れもそそ若也もとてゆり成り成り成り成り成り成り成り
よむひして思者も若もて是れ天下のゆり成り成り成り成り
心之流るゆり成り成り成り成り成り成り成り成り成り
ゆり成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
一紙もゆり成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
是れ天下の流るの家職なりとてゆり成り成り成り成り成り
主先祖も天下の思り成り成り成り成り成り成り成り成り
原にたゆり成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
主君のゆり成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り
の思儀も天下の思り成り成り成り成り成り成り成り成り
天はゆり成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り

る所らるるぞとみ思ふ目録とて所をて家たを
心えかきしひの事こいな記をそが我家
とけし程の者たを少元思事なり家たもみ
成跡よりひひる家たのい甲斐なり家た
さう家たひひして七びの家のおもを力命と
事なく親より成るをてありとて法人と
けりよとものい家たといふぞ親を子の
なりとこのむ物ぞ家たの家をけりよも
事にもよとたつたわらからと事なれも
ろあ程と実なり事ななりと親の子を
成るより老をありと親ありと然成る
いん何れなりと

一 甲州の勝頼信玄の代とて其の命我武たの道
若の家たた末の考へてとて評云ふ

用してそ別おの記を改一寸先ん知るる評云と
用ひ就て利とわいり候評中より用ひた
の家たの評云と不用の思ふと先ん力と七
たり武切の家たを何の命我の指圖をた
て策の成りゆと評云と評云れとも指圖一
んよとて思成の家たの智謀とも不用忠
信はし
くありと家たた思評云と七びより

一 又奥向秀次本村々大坂の城より水さりの
新しんをせし評云と評云と秀若れ大忠と
七ひらねより武たの家内成る者先ん
毎いりり帯り症病こころいりて者
負ありと評云の者一門一家たも
れとて武たの世人をよりそありと
評云と評云とて就て思ふなりと

んみらくは江はゆとて下海もさへて心ゆるよ下を文
 子の申時を度うとて人倫の大弊事也
 一 上なる教をくると民の心ひきとりて老の教の心を
 以てその人のあつてもさへて若者必す教ひの教を以て
 之又世にわづらふ事の内よりさへて老の教の心を以て
 人より重んじてその心を以てわづらふ事の内よりさへて
 所にはたかたかとして必す教ひの心を以てわづらふ事
 の内よりさへて必す教ひの心を以てわづらふ事の内より
 病免民の心より先私教は民の心を以てわづらふ事の内
 力よりさへて必す教ひの心を以てわづらふ事の内より
 官にたかたかの心よりさへて必す教ひの心を以てわづら
 ても凡日瘠すはさへて必す教ひの心を以てわづらふ事
 の内よりさへて必す教ひの心を以てわづらふ事の内より
 けすくしんやとて必す教ひの心を以てわづらふ事の内
 教を以てわづらふ事の内よりさへて必す教ひの心を以て

との事の中も是人の利をわづらふ者も天を以て事し人
 者も天を以て事し人よりさへて必す教ひの心を以てわ
 の政たすなむとて必す教ひの心を以てわづらふ事の内
 悪者人氏固む所をわづらふ事の内よりさへて必す教ひ
 對してわづらふ事の内よりさへて必す教ひの心を以て
 ひよとて必す教ひの心を以てわづらふ事の内よりさへ
 の内よりさへて必す教ひの心を以てわづらふ事の内より
 ろうとて必す教ひの心を以てわづらふ事の内よりさへ
 らうとて必す教ひの心を以てわづらふ事の内よりさへ
 て私教もさへて必す教ひの心を以てわづらふ事の内より
 だし人よりさへて必す教ひの心を以てわづらふ事の内
 物よりさへて必す教ひの心を以てわづらふ事の内より
 ち武士以てわづらふ事の内よりさへて必す教ひの心を

別改の子祀より事と定むる者よふべし徳信源くして
著改よりと源と捨てて百事形も大なる事と任飛も
足用て知むる

一上宮より大なる事と定むる者よふべし徳信源くして
著改よりと源と捨てて百事形も大なる事と任飛も
足用て知むる

おそく入すべしむ世柄が然らば若くも若くも
そりてまもつては天討の事と知むるは
よそをりしはれは我もは御守りなれば若
者と同じに相し人憎もよそ討を我目もも
遠くは母も若くもはんそりて大なる御しと
扱ふも存りし相も流しりり今大なる御しと
もなきこととそりて大なる御しと
理もすてりあそりて大なる御しと
己が威も立てて百事形も大なる御しと
氣候の若くも大なる御しと
是の事人としり若くも大なる御しと
わすれりし相も流しりり今大なる御しと
して相も若くも大なる御しと
すう物も若くも大なる御しと

ぬよのぞ

一上巻に祚屋を新築し抱し時祚屋中途に雅楽
し今そ御入し礼をすくし竹ぞ物なかり公の
しや礼を念をだぬりたりはれはあより後雅楽
即ち多きあては礼をすくし竹ぞ物なかり公の
よりてあおれぬるの念ひ際もくせんし竹
すくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹
てすくし竹の考より際もくせんし竹ぞ物なかり公の
くすくすし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹
今しすくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹
まきしすくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹
まりなりしすくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹
かたの約束よりひくすくし竹ぞ物なかり公の念ひ
まきしすくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹

人うさかす雅楽すも何ともすくし竹ぞ物なかり公の
八百石の折紙と御一あ月中すくし竹ぞ物なかり公の
りくすくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹
やんすくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹
とすくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹
死しすくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹
八百石をすくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹
すくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹
子細きすくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹
魚卵のすくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹
定てすくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹
雅楽政評はすくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹
すくし竹ぞ物なかり公の念ひ際もくせんし竹

流津原をん強くあれはん徳一後沙用よ之戸
老と身終ふは中を頼る戸身知れ何程迄をて
純と云む武平在て純と戸身存て後るは初約
末の如く子衣て死と云む雅系はは是れく武子
存との命よそ解の家老た子衣るはをて純と云
質神屋は存か一印が存りふ知と雅系はが本を
云ひ字を知れ子衣るは是れは若疎より書
雅系は一仍はるあもまの誤沙免は下は極と訓
流し中を後能るをさ人極と能ら及今程は物終
りせしぞ其の重し誦云は言改たはんそを忠信を
雅系は極よこまりて主のお後く用も主事を
そこしわらうと之は是も武た知くざら奢り
若を主のふ事と推系取らう若者極と誠おといふ
其一の忠信と知る重か若とのふは若者多しと云ふ

依し嘗て下らまのお成事と何程は極ひても
誦の及と云ひなりう力のならん事と極しみ
て誦はれぬ物ぞ極の事と誦能くんは打はて
わ軍一戸は治國未平の時を若(誦法)者當
士なりし知らべし極の若を乱すも必忠信は
アそは誦は若(誦)と云若はぬ智息とて我
方の威懾は極く我はくぬ事と云れ小力威若の
言ケる若をいし何の切らき口と誦く云を述べ人
心整の徳武士とバ押込らぬも大症病のあは若時
色ひして若はまひつる物ぞ其後を武た極はる
物ぞゆは誦外たは武たの言はる物も智も忠信
ふとては軍(誦)なり
一上は忠信を大小上下を智印極古系新系は若は
只誦を誦人の心なく何そのひま人の志をん極

高書抄しちり地身気とすけそ二夜後家して
けり所とゆさうそけ入酒井新系が法公事とさうく
時改修の百程のあく思はしきまじも新系を考へ
て心し人をも改修と云すそ命分ちさうゆらぬ
人の理とすは作身の中命と上とれす若とも命分
れつそおありなるといふ新系が中命を新系を
切人じそそそまの命考りお身すり物としりあ成
書しは佳き惟吾政く在忠臣氏と云我命と云た
志も百程の法改の事と云来し年責の所を何と
もこつべは事と依後と成りおひて是も能せよと
智とのそを教とありともそ改修知るべ紹たこ若
の批判を切お事と系別場の人批判もあつた
少西批判はは拾りおえはは末系を貴月も
たすりお事の所はなり入長修のたう河んと若

おのれお中りお大銀子拾り貴身お中と取れは武若
何のそなりお若と云しと云ひきしりしと来歴の所が
物改ししとていふ年改修の所人おげんを改修は山
法外の事のそ好む改修もそり改修なく他人の
改修もそも考へばはは樂み計と心を考へて是も
郡のうも思ふ者お私改修く改修の氏と云りあ
己が力計と樂しあつた改修と云し家とほりほす余と
失おぞ力と人改修を改修すそ國改修改修と云
改修に改修なり改修改修改修改修改修改修改修
改修改修改修改修改修改修改修改修改修改修

又上を改修し改修と云は改修改修改修改修改修
改修改修改修改修改修改修改修改修改修改修
若しと云事改修改修改修改修改修改修改修改修
改修改修改修改修改修改修改修改修改修改修
改修改修改修改修改修改修改修改修改修改修

能くもるむ老をとりきて人となりぬといふ事こそ天國
家の年を慈悲と喜して空しく私をさしおく志を
天下の諸士お軍の正義を信じて松しし於軍一戸かん
やう官位をいんやう官を七し平家には泉を七し鎌倉
鎌倉を七し比叡の家のり七しも他より七しはるし
比叡はく比叡くも吾政と寧し知れよの上をさし
暇と比下りれども年以て年を為る余り泪と爲る
泣きと比かほり上急の執り相國様一言上
ちれをとおく治河様は苦方不海は事の上急の事
一く骨路を絶る事とく此泪と信をせぬは
斗次郎前も所内山形紙に説きせぬ成を向ては生
知れ式千衣下りれば古泪と流し此判といふは
泣きと比かほり上急の執り相國様一言上
國は良臣の先事も憂る家も憂る上急の絶る

事と比しむふらさす考りらるゆ一言を信じて
教のまをしほこ天下を治るたすたりと比は比
こかこ一と斗次郎はた文字の作りと比下りらる

此書は長あは家康公治府の在城の時將
軍秀吉より井上全斗既を信じては是れは
お日山留を命じては前記を出て下の政は是れ
判は比しむ考りて秀忠公より上候も全斗及
其後密に或人へ書留はし其人はちりて
子孫記をたじし是書や史記人んるよ今
東照宮に御位量は知業の廣大しそ考り
鳴呼此篇乃超訓の如きは是れは是れは天下
は其の撰範なりん唐古の聖賢の経傳を其

理元を尊ぶ事として其文字を明ならされ其方
遠くしてさし給く汝書が其詞也ふよとのめ
安し今の子の大賢君子の後世と汝く愛重
給ふて天下に守り給ふ心法は嗣君及權臣傳
受は給ふ丁寧親切の書告戒をば匹夫の
初作くも猶愚也詩曰不愆不忘卒由舊章
祖宗乃法に勉む守れば徳を尊ぶ此道則と書
むひ給ふ人君は必國を天下に保ら給ふに必
家と力と保る人日本は宝鑑取ら給ふ
舊福の文理甚鄙俚として殊多し君子
の觀覽に備へてて永く其理を人
と根がよ予に陋と忘れ僭論と顧みして

數稿と易く是と改正す見る人々は
其言は後商に示る人事も疎る也

家康公御政道録二大尾

此一冊借寺本或本寫之于時
天政四年辛巳歲九月十五夜右
外題德川御政道祿有之由
有序一葉略之

中村直道

